



ノルウェー国立バレエ、アレクサンデル・エクマン振付『ある白鳥の湖』での稲尾芳文 Photo: Emma Kauldhar

## 『ある白鳥の湖』

アレクサンデル・エクマン演出振付の一風変わった『白鳥の湖』。ノルウェー国立バレエによる世界初演を、ジェラルド・デイヴィスがリポートします。

今思うと、はたして私は本当にエクマンの作品をオスロの歌劇場で観たのだろうか。寝る前にチーズをつまんでしまったから、あれはもしかすると胃もたれがもたらした悪夢だったのではないか。それも狂気に満ちた？

三幕に分かれた本作は、そこそこにプティパの亡霊が姿を現すものの伝統的な『白鳥の湖』との関連はなく、1877年に設定されている第一幕も、むしろピナ・バウシュとメル・ブルックスの出会いとでもいった趣きだ。派手な音を立ててドアが開け閉めされるたびに、1930年代風の薄ピンクの衣装を着けた奇妙な人物たちが飛び出してくる。ぼろをまとったドラッグ・クイーン、オペラのディーヴァ、標準的な核家族、おかしな足取りで白鳥の撃ち方について蘊蓄を傾ける鳥類学者、幸せなゲイのカップル等々。それぞれは、いかにもバウシュ的なスタイルで動きを反復し、語り、叫び、一見無関係な情景を繰り広げる。ここで示されたアナーキーな調子が、本作の通奏低音として続いてゆくことになる。

アメリカ人映画監督のブルックスが『ザ・プロデューサー

ズ』を作ったのは1968年。新作ミュージカルをわざと失敗させることで一攫千金を企てる二人の男の物語だが、エクマンはモスクワのポリショイ劇場における『白鳥の湖』の世界初演（1877年）が不評だったことをそれに絡め、舞台上で二人の喜劇俳優に、このバレエがそもそも失敗する運命にあったことを語らせる。『白鳥の湖』のストーリーの面白おかしな朗読に、大げさで滑稽なジークフリート、つっけんどんなオデット、全く恐ろしくないロートバルトの古典バレエもどきの踊りが重なる。伝統的な名作を笑いのめしながらも、そこには愛情があり、創造の過程に対する細密な評価はどうあるべきかについての重要な指摘を含んでいる。

第二幕は現代へと時間が進み、視覚と音楽と振付のいずれも第一幕との関連のない、抽象的で現代的な『白鳥の湖』が上演される。舞台のほぼ全体に数センチの深さに水を張り、周囲からの照明によって舞台全体から客席にかけても美しいさざ波が描きだされる。はじめの部分は非常にシリアスで、丈の詰んだダークスーツにキャップを被った大勢のダンサーたちが手や足で水しぶきを上げる場面は、ときに仕掛け花火を思わせる驚くべき美しさだ。何人かは水上を滑るようにして、両足で、脇で、そしてときには四つん這いになって、水面の端から端までを移動していく。みごとな眺めだ。チュチュ姿で白鳥と黒鳥を演じたカミラ・スピショとメリッサ・ヒューの対決も魅力的だ。黒鳥役のヒューは、相手に平手打ちを食らわせたかと思うと慰めに転じる。そして二人がユニゾンの動きで水面を滑っていると、それぞれのパートナーが膝まづき腕を差し伸べて近づいてくる、それが絶妙な効果を上げていた。

やがて舞台から人々が去り、アメリカン・フットボールのプロテクターとヘルメットを着けた稲尾芳文だけが取り残される。頭上からは何百ものアヒルのおもちゃが降ってきて、場面は再び狂乱に陥る。スーザフォンを吹く男がおり、ビーチボールを抱えたグループが現れ、別の人々が遊具を膨らませている。両足の甲にバケツを乗せた男がふと立ち止まり、さらに別のグループは口から水を噴き出して複雑な噴水を描きだす。そして最後にオペラのディーヴァが戻ってきてヘア・ドライヤーを水に取り落とすと、他の出演者たちは感電死してしまう。ここで幕かと思われたが、エクマンはさらなるアイディアを袖から取り出してみせる。ロウソクの灯りの下で死者たちを讃える演説が始まると、彼らは生き返り、荘厳な様子で水面にリズムを刻み始めるのだ。エネルギーのレベルは徐々に高まり、嵐のような激しい動きとなだれ落ちる水の中で幕となる。みごとなクライマックスを演出しておいて、さらにそれを上回る場面を作り出すことのできる、このような振付家はまれだ。

第三幕は、それから427年後の未来を描いたわずか数分間のものだが、翼の生えたロボットが踊る、という以上の説明は要しない。（訳：長野由紀）